九州・沖縄作曲家協会 *Journal*

KYUSHU OKINAWA COMPOSERS ASSOCIATION　2019 年 4 月号 vol.6

皆様すでにご存知の通り、元会長の中村透先生が去る２月７日にご逝去なさられました。先生は 2012～2015 年度の４年間、第５代会長として協会のために尽力なさられました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

中村 透（作曲家・芸術文化学博士）　（2012 年 10 月 27 日浜離宮朝日ホール「中村透音楽展」プログラムより）

北海道出身。国立音楽大学大学院修了。琉球大学教授・教育学部長を経て、2012 年より音楽工房・凜、および沖縄創作オペラ協会を主宰。九州・沖縄作曲家協会会長、日本作曲家協議会会員。琉球大学名誉教授。1975 年の沖縄在住以来、沖縄の文化・民族財を題材とした合唱作品、オペラ、器楽曲等で独自の作風を追求してきた。吹奏楽のための序曲「ばんがむり」が、1977 年、国民音楽振興財団作曲コンクール第一位を、オペラ「キジムナー時を翔る」が、1991 年、文化庁舞台芸術創作奨励賞特別賞を受賞。

ご逝去後、国より正四位瑞宝中綬賞が授与されました。

中村透先生が本協会主催演奏会に出品なさられた作品一覧

第１回九州現代音楽祭	1980 年	住吉浜リゾートパーク（大分）	贄（ひだ）
第３回九州現代音楽祭	1982 年	住吉浜リゾートパーク（大分）	フルート、ピアノのための三つのイメージ
第６回九州現代音楽祭	1985 年	都久志会館（福岡）	３人の打楽器奏者のための連鎖
第９回九州現代音楽祭	1988 年	琉球放送 R.B.C.ホール（沖縄）	西表民謡へのオマージュ
第 11 回九州現代音楽祭	1990 年	戸畑福祉文化センター（福岡）	合唱組曲「さよなら三角またきて四角」より
第１６回九州現代音楽祭	1995 年	産業文化会館ホール（熊本）	沖縄民謡集より
第１７回九州現代音楽祭	1996 年	シュガーホール（沖縄）	故者への譜～沖縄古謡による～
第 21 回九州現代音楽祭	2000 年	霧島国際音楽ホール（鹿児島）	混声合唱組曲「真南風の祈り」より
第 22 回九州現代音楽祭	2001 年	シュガーホール（沖縄）	ＳＨＵＲＡ～独奏ヴァイオリンのための～
第 25 回九州現代音楽祭	2004 年	宮崎県立芸術劇場（宮崎）	レキオス第３番～十管楽器のための～
第 27 回九州現代音楽祭	2006 年	あいれふホール（福岡）	月の山の端に～ソプラノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスのために～
第 29 回九州・沖縄現代音楽祭	2008 年	国立劇場おきなわ（沖縄）	小劇場「無の題」
第 31 回九州・沖縄現代音楽祭	2011 年	沖縄県立芸術大学奏楽堂ホール（沖縄）	金管楽器のための３つのファンファーレ
第 32 回九州・沖縄現代音楽祭	2012 年	ももちパレス（福岡）	三村節
第 34 回九州・沖縄現代音楽祭	2014 年	都城市総合文化ホール（宮崎）	女声合唱組曲「季節」女声合唱のための「いつまでも恋」
第６回春の音楽展	2015 年	ハートリスニングホール（宮崎）	摩文仁野―白き風車―
第８回春の音楽展	2016 年	あいれふホール（福岡）	チェロのための「トゥバラーマ変奏曲」

「旅」

透さんは、北海道に生まれ育って 18 年、東京を経て 1975 年沖縄に居を移し 44 年を過ごしました。

琉球大学を退官後、作曲家とホールの芸術監督として多忙な日々を送っていましたが、家では気分転換にサスペンスドラマを観て、毎晩晩酌しながら喋り、大声で笑い、落語を子守唄代わりに聞きながら眠りにつくのが彼の日課でした。

また旅が大好きで、北海道や沖縄の離島はもちろんのこと、全国各地、東南アジアや中国、韓国、ペルーのマチュピチュ等、一緒に旅をしたことが、昨日のように思い出されます。五感を揺るがす新しい出会いに、感動とエネルギーを無意識にもらっていたのでしょう。

最後の旅は去年の５月の北海道でした。札幌と沖縄の合唱団とで北海道を題材にした女声合唱組曲「雪の貌」（中村透作曲）を合同演奏するためのツアーでした。雪を想像しながら、詩の解釈と透さんの世界観を表現できるように沖縄の合唱団 30 人と練習に励んでの本番でした。彼も喜んでいました。

その後の観光は、快適な気候の中、花を見て、美味しい物を食べ、旭岳で雪山を歩き、温泉に入り皆で楽しい時を過ごしました。今振り返ると、神様から透さんへ最後のご褒美を頂いたのでしょうか。

好奇心が旺盛で、心はいつも青年のような透さんでした。彼は他を思う気持ちが強くあったので、たくさんの方から求められ慕われてきたように感じます。私はそんな彼を今でも尊敬しています。もっともっと一緒にいたかった。

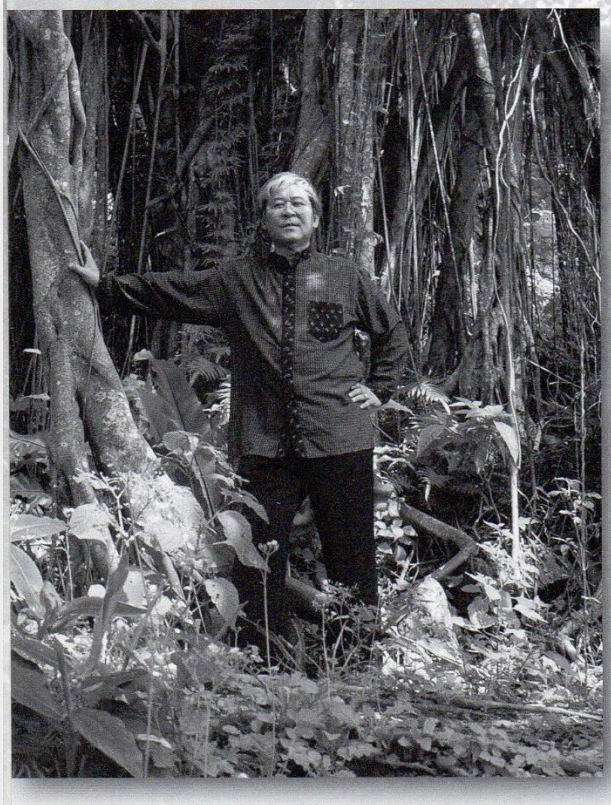
これからも皆さんと共に透さんの作品を愛し、演奏の旅を続けていきたいと願います。　　令和元年５月　中村 律子

（背景…2012 年 10 月 27 日浜離宮朝日ホール「中村透音楽展」プログラムより）

越境する沖縄音楽

”ちゅら“という言葉は、”清ら（きよら）“が音韻訛したものです。
沖縄の音楽には、清ら音（ちゅらね）への憧憬が色濃くあり、
その底には、自分のなかから生じた気持ちのままに
自然体で歌う姿勢が尊いという想いが綿々と流れています。
清ら音への憧憬を地下水脈にしながら、
沖縄の音楽文化は絶えざる異文化との交流を通して、いつも動態的に渦巻いています。
ことばと体が、ハイカルチャーとポップカルチャーが、
そして伝統と現代とがやすやすと越境し合うのです。
その越境性のなかに身を投じて、私は音楽創造を模索してきました。

中村 透



「想い出」　田村 徹

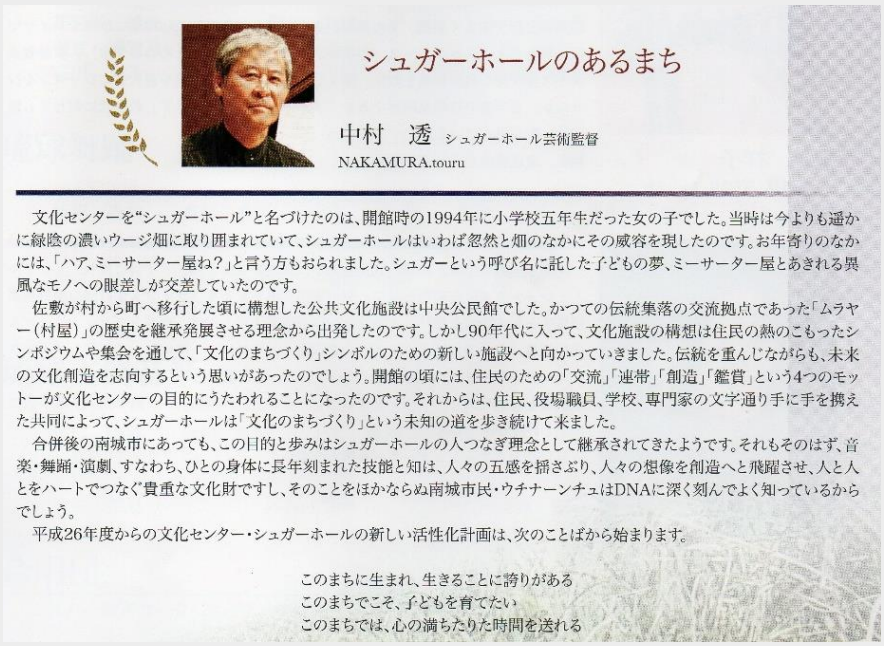
生涯の想い出である作曲家のお一人に中村透さんが居ます。古い話で申し訳ないが、九州作曲家協会を創設しようという機運が私の弟・田村洋彦名誉会員の周辺で盛り上がり、創設のための会合を数回持つのであるが、その折？に「自分と同じ年の作曲家」であるとの紹介を受けたのが、スマートでどこかはにかんだような雰囲気を持つ沖縄在住の好青年・中村透名誉会員でした。会の運営が軌道に乗り始めた頃、会の名称を「九州作曲家協会」から「九州・沖縄作曲家協会」に変更するのであるが、そのことを強く主張されたのが中村さんでした。以来沖縄での作品演奏会(現代音楽祭)が頻繁に行われるのであるが、音楽祭に前後して中村さんのオペラ「銀行強盗」と「キジムナー時を翔ける」の２作品を鑑賞したこと等が想い出に刻み込まれて居ます。

私にとって特筆すべきことの一つに、中村さんから「沖縄に俳句文化を広めた世代の俳句に作曲してください」との依頼を受け、取材のため沖縄に３日間滞在し、取材を元に歌曲集「南島俳句歳時記」を作曲したこと。この歌曲が時を経て中村さんが音楽監督をしているシュガーホールで奥様の律子(ソプラノ)さんの演奏で初演されたこと。沖縄で国際音楽コンクールを主宰され、その審査を頼まれたこと等々、想い出の糸を手繰るときりがありません。

中村透さんが居ない世界は少々淋しくしんどく思います。

「中村透さんへ」　尾﨑 敏之

中村透さん。貴方に初めて会ったのは 1980 年ではなかったかな？ 確か 1979 年湯布院の発起人会の中にはいらっしゃらなかった気がします。翌年だったか初対面にも拘わらず、頻りと議論を挑まれたと記憶しています。同じ様な年恰好だと思っていたものの、この物言いは私より１～2 年上かなと推測しました。暫くお話をしていて、同じ歳(1946 年)である事が判明した時は、思わず「何だこの～！」となり、貴方も笑っていましたね。私を知っていて、私を試していた様でした。それ以来同輩として、忌憚の無い会話をする様になりました。貴方は大変な努力家で、ある意味で「肩肘を張った」生き方をしている様に私には映りました。そして何人をも自己の内へは入れぬ「壁」を作っていた様にも思えました。日本の北から南へ向かい、全く違った文化の中で責任ある立場での生活が、貴方をそうさせたのかも知れません。ある時からその「壁」を私に対しては取り払ってくれ(と私は感じました)「尾﨑ちゃん」「透」と呼び合う様になりましたね。壁の扉を開いてくれた貴方の中に、「少年」を垣間見た事もありました。プライベートで沖縄へ行った時、レンタカーの手配をしてくれた事、「中村透一押しの沖縄料理居酒屋」へ私の家族も含め招待してくれた事、30 数年前に東京恵比寿のビアガーデンで、飲んで騒いだ事等々「追想・追憶・想い出」は枚挙に暇がない程です。貴方は 72 年の人生の足跡をしっかりと残しました。ただ逝くのが一寸早過ぎました。遣り残した事もあったかも知れませんが、「散る桜 残る桜も散る桜」です。貴方は見事な花を咲かせ、「1946 年組」から少々先に旅立ったのです。透さん安らかに。それ程遠くない未来に、また会うまで。　合掌


シュガーホールのあるまち

中村　透　シュガーホール芸術監督
NAKAMURA.touru

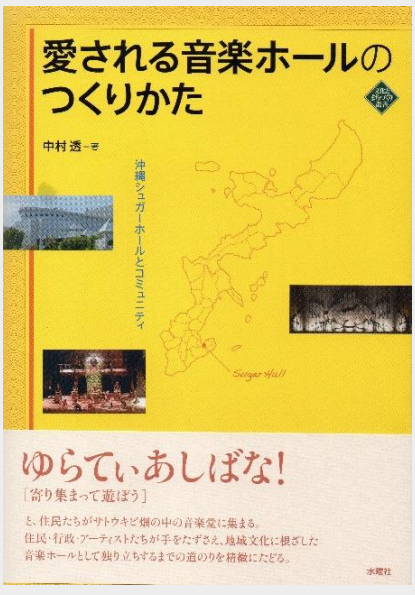
文化センターを“シュガーホール”と名づけたのは、開館時の1994年に小学校五年生だった女の子でした。当時は今よりも遥かに緑陰の濃いウージ畑に取り囲まれていて、シュガーホールはいわば忽然と畑のなかにその威容を現したのです。お年寄りのなかには、「ハア、ミーサーター屋ね？」と言う方もおられました。シュガーという呼び名に託した子どもの夢、ミーサーター屋とあおされる異風なモノへの眼差しが交差していたのです。

佐敷が村から町へ移行した頃に構想した公共文化施設は中央公民館でした。かつての伝統集落の交流拠点であった「ムラヤー(村屋)」の歴史を継承発展させる理念から出発したのです。しかし90年代に入って、文化施設の構想は住民の熱のこもったシンポジウムや集会を通して、「文化のまちづくり」シンボルのための新しい施設へと向かっていきました。伝統を重んじながらも、未来の文化創造を志向するという思いがあったのでしょう。開館の頃には、住民のための「交流」「連帯」「創造」「鑑賞」という4つのモットーが文化センターの目的にうたわれることになったのです。それからは、住民、役場職員、学校、専門家の文字通り手に手を携えた共同によって、シュガーホールは「文化のまちづくり」という未知の道を歩き続けて来ました。

合併後の南城市にあっても、この目的と歩みはシュガーホールの人つなぎ理念として継承されてきたようです。それもそのはず、音楽・舞踊・演劇、すなわち、ひとの身体に長年刻まれた技能と知は、人々の五感を揺さぶり、人々の想像を創造へと飛躍させ、人と人とをハートでつなぐ貴重な文化財ですし、そのことをほかならぬ南城市民・ウチナーンチュはDNAに深く刻んでよく知っているからでしょう。

平成26年度からの文化センター・シュガーホールの新しい活性化計画は、次のことばから始まります。

このまちに生まれ、生きることに誇りがある
このまちでこそ、子どもを育てたい
このまちでは、心の満ちたりた時間を送れる



⇐「シュガーホール開館 20 周年記念国際音楽祭開会式典・コンサート」パンフレットより

中村透著「愛される音楽ホールのつくりかた」(水曜社)
奥様から献呈いただきました。

§会員活動の紹介§

ピアノ曲「ルソンの壺」について

石田　匡志

昨年、鹿児島在住のピアニストである有満玲子氏から「ルソンの壺」という題名でピアノ曲を作ってほしいとの依頼を受けた。参考資料として久生十蘭の小説「呂宋(ルソン)の壺」をいただき、読んでみたら非常に考えさせられる話であった。

「ルソンの壺」とは、フィリピンのルソン島民が生活用品として日常的に使っていたごくありふれた壺であったが、安土桃山時代、貿易商人呂宋助左衛門によって日本で披露された際、なぜか不当な高価値がつけられた。小説は、まだ日本では壺が高価なものであると信じられていた頃の話である。

ルソンの壺を入手する使命を受けた主人公は、ルソン島へと船出する。その旅は過酷であり、船が海賊によって焼かれたり、大嵐に見舞われたりと数々のピンチが襲う。苦難の末、主人公はやっとのことでルソンの壺を手にするが、同時にそれが現地では特に価値のないものであることを知る。

この話は、スリルあふれる道中の描写と、実は無価値な物のために命懸けの旅をしていたにすぎなかったという結末の虚しさとのギャップが激しく、初めどう内容を捉えればよいのか戸惑った。結局主人公は壺の「価値」に翻弄され、いらぬ試練に苛まれた気の毒な者ということになろう。しかし壺に価値があろうがなかろうが、その濃密な旅の体験自体には価値があると解釈することもできるのではないか、と感じた次第である。

ピアノ曲「ルソンの壺」は、この主人公の道中記をそのまま構成にいかした内容となっている。動機労作に則っており、特定のモチーフが時には壮大になったり、また時には滑稽な雰囲気になったりと、まるで様々に「価値」そのものが変動していくようなイメージを音楽的に描いてみた。この創作活動が、改めて「価値」というテーマについて考える貴重な機会であったため、以上のような文章として留めさせていただいた。早く初演を迎えたい。

§今後の協会事業のご案内§

♪KOCA: A Japan-Canada Exchange

2019年6月7日(金)20:00 Waterfront Theatre（in Vancouver, Canada）

出品作曲家：衛藤恵子、近藤裕子、斎藤武、原田大志、吉岡愛梨、米倉豪志

♪West Coast International New Music Festibal β ～ Gifts from Japanese musicians ～

2019年6月9日(日)15:00 Canadian Music Centre（in Vancouver, Canada）

出品作曲家：衛藤恵子、近藤裕子、斎藤武、原田大志、吉岡愛梨、吉田峰明、米倉豪志

♪第39回 九州・沖縄現代音楽祭 in 宮崎

2019年9月21日(土)14:30 宮崎市オルブライトホール

招聘作曲家：Dietmar Schermann

出品作曲家：石田匡志、衛藤恵子、金井玲香、熊本陵平、齊藤武、中園哲也、安川徹、吉岡愛梨、吉田峰明、米倉豪志

♪第40回 九州・沖縄現代音楽祭 in 佐伯

2020年秋開催予定

§賛助会員募集中§

九州・沖縄作曲家協会では会の趣旨に賛同し、所定の年会費を納める方（法人もしくは個人）を賛助会員として募集しています。年会費は法人会員一口 10,000 円、個人会員 3,000 円です。会員になると本会主催事業へのご招待、機関誌「ジャーナル」の受け取り、法人会員については本会主催事業プログラムに法人名掲載などの特典があります。詳しくは事務局にお問い合わせください。

＜九州・沖縄作曲家協会＞　http://kcaj.net/　（「Journal vol.4」以降のバックナンバーが PDF で掲載されています）
〒889-1605 宮崎市清武町加納乙 62-62（衛藤方）／Tel.0985-85-5764／E-mail etokei@mub.biglobe.ne.jp